

青山霞村の系譜・出自に関する一考察

中西 裕

歌人青山霞村の伝記的事実について前稿に書いたが、掲載した系図に訂正・補足を要する事項が出てきた。本稿ではそれらを含めて、霞村の系譜と出自について記してみる。

一 青山霞村

まず報告すべきは、青山霞村（明治七―昭和二五）の墓所が見つかったことである。京都市中央図書館、真宗大谷派善福寺、北村石材店のご教示を得て、二〇一七年八月に現地を確認することができた。²霞村の墓所は、京都市伏見区深草真宗院山町二六に存する真宗院の北にある真宗院墓地、六体の地藏の東側にある農小屋の北側に存在している。ここには現在七基の墓碑が立つ。霞村のそれは西端にある。

この墓地にある霞村以外の墓碑は、青山蝶子、青山良輔、青山田鶴、休和・恵静（和造・ハル）、良碩・妙和（碩・和）、卓淨（卓二）の六基である。なお、このほかに、夭逝した子のためのものであるうか、首が失われた小さな仏像が蝶子と良輔の間に存在する。

七基のうち霞村を含む六基に書かれている文字は以下のとおりである。

（正面）青山蝶子之墓

（左面）明治四十三年四月十八日

（正面）青山良輔之墓

（左面）明治四十一年四月十六日

（正面）青山田鶴墓

（左面）昭和十二年八月建

青山和造

（正面）休和

釋 尼恵静

（左面）昭和三十九年二月建之

青山 碩

（裏面）昭和四十四年五月二十二日歿

五代目妻俗名 ハル 行年九十三才

昭和三十七年二月十六日歿

五代目俗名和造 行年八十才

（正面）青山霞村之墓

(左面) 昭和五十年七月建之

青山策馬

(裏面) 本名 嘉二郎

昭和十五年二月二十七日歿

(正面) 良碩

釋 尼妙和

(左面) 昭和五十五年一月建之

青山 碩

(裏面) 昭和五十七年十月十七日歿

六代目 俗名 碩 行年八十一才

昭和五十三年四月一日歿

六代目妻 和 行年七十三才

七基目は平成二九年二月に建てられた「青山家之墓」で、現在、卓一が埋葬され、建立者の氏名も記されているが、現存者の個人情報でもあるので、省略する。

記したように、霞村の墓碑裏面には「昭和十五年二月二十七日歿」と歿年月日が明記してある。日については二六日説と二七日説とが存在していることを前稿で書いたが、想像したとおり『追悼集 VII 同志社人物誌』などの記載を訂正すべきことが明確になった。歿後三五年を経ての建立ではあるが、確定したと言ってよい。

以上から判明した系図を、修正版として掲載する。

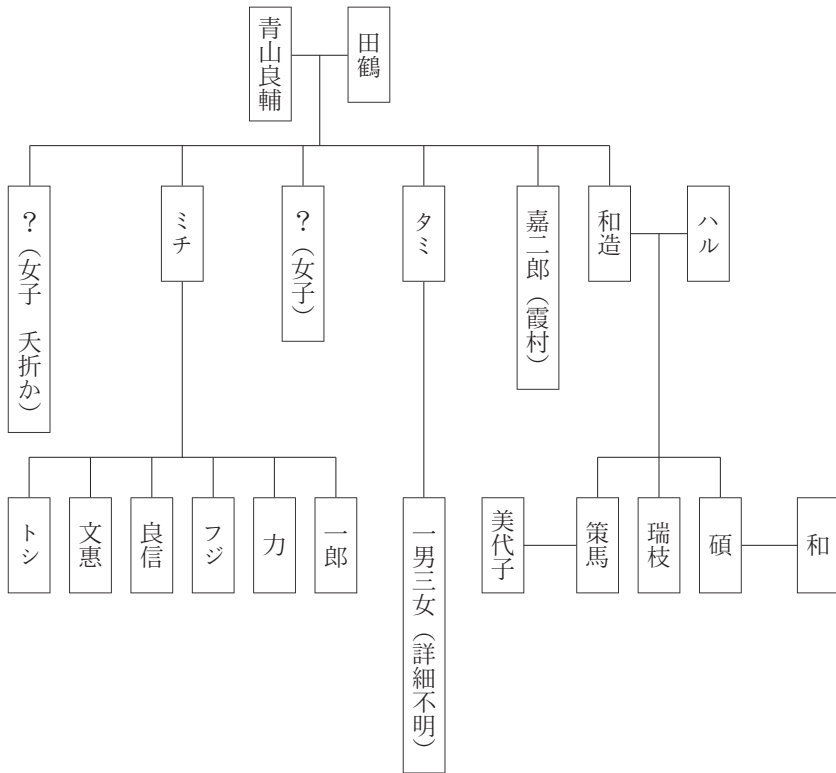
この場所のすぐ北奥、やや高くなつた所に「青山本家」の墓がある。そこには、ごく小さな一基を含めて一〇基の墓碑が立っている。ほとんどは天保・文久年間建立の小ぶりの墓碑であるが、比較的近年のものが一基存

在する。「青山家之墓」がそれであるが、これについては後述する。

二 青山良輔

霞村の父の名を、前掲論文に入れた系図で「幸昌」と記した。しかし、墓碑には「良輔」と明記してあり、他の文献にも、こちらの名が記されている。

もっとも、幸昌が誤りであると断定することもできない。筆者が系図上



霞村のきょうだいのおよびその次の世代までの系図 (修正版)
和造の娘瑞枝は碩より年長の可能性もある。

で「幸昌」を採ったのも霞村自身が自著で次のように書いているからであった。

曾祖父の名乗のほつた『幸延』の黒い印形。父母が幼い時にじぶんのにしてくれたからたいせつに今も持つてる。³

十七年前亡くなった、／父の手篋をふとあけてみて／静かな初夏の昼過ぎに自分は淋しい独言／時の流転をしきりに感じてをつた。／「咏草。何だこれは歌の詠草だ。／幸昌。おゝこれは代々幸の字をつけてきた父のあの名乗ぢやないか。／アツ歌が十ほど書いてある。／生涯歌を学んだなどと言も俺にはなんだ／父にこんな時代があつたのか。／そして明治のこの年は俺の生れた前年ぢや。⁴

青山家では代々「幸」の名を付けていて、霞村の曾祖父が「幸延」で父が「幸昌」だという。それを信じたのであるが、青山良輔以後の青山家および青山本家のすべての墓碑を見ても「幸」の字は皆無である。別名としてこれらの名が使われていた可能性は残っているものの、記述を素直に信じてはいけないのかもしれない。そのうえ、あとで記すように良輔は養子である。本来の名ではない。要するに、霞村の父は一般的には良輔の名で知られており、こちらを採るべきである。

では、青山霞村の父にあたる青山良輔とはどんな人物か。良輔は青山家四代にあたる。弘化四（一八四七）年一月一六日に綴喜郡箕山村に、田村喜太郎の次男として生まれ、明治四年四月に青山家の養子となり、家女田鶴と結婚した。生家は農業のかたわら質商を営んでいたとされる。養家は三代前に分家して、やはり質商を営み、直達橋北一丁目に質店を持っていた。

た。明治一六年三月の府会議員補欠選挙に当選し、一九年一月まで一期務めて退任した。二男四女があり、明治四一年四月一六日、急性肺炎のために直達橋北一丁目の自宅で死去、享年六二。⁵

議員であった年代については別の資料で確かめられる。ここでは職業は「農業」とされ、「資産関係」の欄には「地一〇〇円代」と記載され、この数字は「地租税金^{七拾円}上納持丸長者鑑」（明治十八年一月刊、中島五郎氏蔵）による。」と説明されていることから、地租額を示すものである。職業について農業と質商がそれぞれの資料で示されているのは両者を兼ねていたと考えるのが順当であろう。

ただし、分家する前の青山本家は、桃山城築城の際に瓦をつくるために播州から出た瓦師で、秀吉から良質の土が出る土地を与えられ、瓦師として盛業をきわめた。⁷ この点は後に触れる。

なお、ここに墓碑がある青山蝶子がどういう関係なのかは不明である。考えられるのは、田鶴の母である。霞村が詠んだ歌に「父がをり妹がねむり祖母が臥す淋しくもないこの山のはか」⁸がある。この三人が同じ場所に眠るとすれば、霞村の祖母に当たるのではないかと想像できるからである。しかし、確証はない。

三 青山和造

良輔の長男であり、霞村の兄に当たる和造^{わぞう}が霞村より二歳年長であることについては霞村自身が明記している。⁹ したがって和造は明治五年生まれとなる。

和造について、霞村は明治四四年の刊行物に「現に家兄は大会に接した二千戸に余る大村落の村長さんである」と書いていた。¹⁰ 村長であった時

期については、当選が明治四一年一〇月五日で、退職が大正元年一〇月一
二日であり、¹¹明治四四年当時は確かにその地位にあった。

この就退任の事情もある程度は判明している。和造の前任者の今邑範這
が明治三七年五月三〇日に当選したが、四一年八月一八日に「疾病辞職し」、
次の石田吉左衛門が三八年一二月一五日に当選し、四一年八月一八日まで
務めたものの、「営業上村内に居住し得ざるため辞職」した結果、今邑が
同年八月二九日に当選しながら、翌日付で「当選辞退」し、それを受けて、
一〇月五日に和造が新たに当選し、大正元年一〇月一二日まで村長の地位
にあった。その後石田の村内居住の問題が解決したのか、大正元年一〇
月二五日には石田吉左衛門が村長に返り咲くこととなった。

和造はその後大正二年五月から六年五月、大正六年五月から一〇年四月
まで、昭和四年五月から六年三月まで、それぞれの期間に町村議員を務め
たことが記録にある。¹²

四 青山碩

和造とその妻ハルの間には碩、^{せき}瑞枝、^{みずえ}策馬の三人の子があった。前稿に
掲げた系図では碩を「碩」と記したが、これは親族の記憶違いで、正しく
は「碩」である。この文字は碑文から確認できたが、東京都調布市内にあ
る青山家に連なる親族の家に残る写真アルバムに遺された書き込みでも
「碩」が正しいことが先に判明していた。

親族の話では、碩は日活の会計の仕事をしており、東京に住んでいたこ
ともある由である。しかし、日活の社史などを見た限りではこの名前は見
つからなかった。碩夫妻には子がなかった。なお、前項で「ミズエ」と記
した和造の長女の漢字表記が「瑞枝」であることも、同じ写真アルバムで

確認できた。

五 青山策馬

和造の次男にあたる策馬は霞村の養子になった。¹³そのことは青山霞村の
墓を建てたのが策馬である事実と照らし合わせても確認できる。しかし、
策馬の墓はこの青山良輔家の区画にはなく、本家の墓の方にある。本家の
方の区画で一番新しい「青山家之墓」の墓碑は昭和五六年九月に青山俊夫
によって建てられた。その横に大きな墓誌が立っていて、そこには策馬夫
妻だけが刻んである。

霊標

尼 美静

昭和五十五年十月九日歿

俗名美代子享年六十五才

正賢

平成十二年七月十五日歿

俗名策馬享年九十三才

日付からは美代子の一周忌を機に「青山家之墓」が建立されたもののよ
うに見える。策馬は霞村の養子となったはずであるが、本家の墓の区画に
埋葬されている。あくまでも想像ではあるが、良輔の子の中で男子は和造
と霞村のみであり、霞村は生涯妻帯しなかったから、策馬を養子としたも
の、子のなかった碩の家も策馬の系統によって継がれていた、さらには
なんらかの事情で本家も策馬の系統が継いだというような事情があるの
かもしれない。

霞村は甥である策馬をかわいがったようで、「兄の次男の入宮を送る歌」
「姪策馬が満洲独立守備隊へ赴任した時」と題する長歌を贈っている。¹⁴

前者は次のごときものである。

この子ゆく国を護りのみたてにとこの子今日ゆく人々が山できつてきた松竹の緑の門も小春日の光を含み歎を黙つて語るわが前で小石なげうち吾膝で話せがんだ兄の子は若松のやうせたけのび雄々しく育ちその父が兄かしたやう劍帯ひ小筒を荷ふつはものに今日なりにゆくこの子策馬は

つゝがなう一年送れ光秀がたてた丹波のよいまちまた

後者では歌の中に策馬の名は出てこないが、これと同じときに読んだものか。次の短歌が残っている。

送別会餞別品吾家の忙しいこと劍を提けて満洲へゆく兄の兄のため（甥が現役少尉として渡満した時）¹⁵

昭和九年に策馬は満洲に赴いたことになるであろう。また、いつのものか不明ながら、「蒙古の消息」と題する次の作を霞村は書いている。

蒙古から手紙がついた。五百日砂と氷と寂寞の中に住つた吾甥の歌がまた来た。朔北は春といつても草や木が芽を出すばかり。馬に乗り日曜日には街近い河へ行つたと。耳に聴き目に観るものもその街にないのであらう。行く時は少年だった。草がもう黄に枯れてゐた。帰る日はどうなつてをろ。巴旦杏の花の盛か。噫男児足ひとあしも故郷を出ないでをつて魂がなに鍛えよぞ。ことさへぐ人に接して人間の平等を知り砂原に照る月をみて深く思へ家と国との愛すべきこと。¹⁶

ここには引用を避けるが、「霞谷村舎絶句自明治丁酉至昭和甲戌」の中の一つに「寄三姪策馬在二黒河」¹⁷もあり、ひとかたならぬ愛情がそそがれてい

る一端がうかがえる。

六 青山家の出自

霞村の書いた「祖母の墓でよんだ長歌」という文章の冒頭に「詣できて立ちさり難く亡き祖父の兄検校の墓石にもたれかかつて悲と思に耽る。」¹⁸とある。これと思われる墓碑が青山本家の墓の一番南側に立っている。その表面には「得忍院廓然前檢校休心居士」とあり、裏面には「文久元辛酉年三月 青山良助」と彫られている。これが霞村の祖父の兄に当たる人物とならう。また、青山良助と良輔が同一かどうかだが、文久元年は弘化四年生まれの良輔は一四歳、墓を建てるには若すぎるし、ましてや良輔が青山家の養子となるのは明治四年であるから、別人である。今のところそれ以上は不明であるので保留にして、瓦師であった青山氏について記す。

深草の地は焼物や瓦の産地として近世末には有名であった。司馬江漢¹⁹「漢西遊日記」（寛政元年 一七八九）には、「深草と云処焼物あり」、大田南畝「壬戌紀行」（享和二年 一八〇二）に「道のべに深草焼の土偶人をひさぐ家多し」とある。川口好和「奇遊談」（寛政二年 一七九九）には「洛南深草山より瓦土を所々掘とる所を塩ふきといふ」といった記述が散見する。先祖が瓦師であることについては霞村がたびたび触れている。自著『京物語』「自序」の冒頭では次のように書いている。「ある人」とは著者がこの本の中で自分を指す呼称である。

この物語の「ある人」とは何人か知れない。彼は自分の先祖は豊太閤についできて伏見城の瓦を作り、深草の霞ヶ谷に瓦師の新しい村を開いた人、外祖父は名高い洞ヶ嶺の一角に、種甘諸の新しい村を開いた人の子である。²²

「生れた家」という作でも触れている。

小山へあがりみおろすと／生れた家が目に見える。／みまいとしても目にはいる。／豊太閤の桃山の／城もはたけになつてゐる。／城の瓦を焼いたちふ²³〔後略〕

また、別に詳しく記している部分がある。長くなるが、青山家の出自を知るために重要な部分であるので引用してみる。

その先祖の前代井上就幸や就次は毛利氏に仕へて陶尼子を討ち、吉田の城に籠城した事もあるが、故あつて彼は幼時播州飾磨郡に移つた。武道を好まず、書を能くし、土細工が上手で人目を駭かしたといふやうな人で、豊太閤が姫路城を築かれるときに瓦の用を命ぜられ、姫路の西の青山郷へ竈を築いて瓦を作つたので、姫路城の瓦も実にその手になつたのである。それで秀吉公に非常に愛せられ、公が摂州に移ると呼び寄せられ、父祖の家名を継ぐやうにと井上與三右衛門幸道の名を与へられた、処が自分は武道の心得なく、その上土職の身となつて先祖の名を汚すことは実にすまぬといつて辞退したので豊太閤は感心せられて、改めて播州の青山の名を賜り、大阪生玉の庄内上町を与へて御城造営の瓦の用を命ぜられた上、浅野彌兵衛の手を経て青山幸道の極印を下され、御城の瓦には悉くこれを押すこと²⁴なつた。幸道は泉州から瓦職久右衛門といふ者を招きこれに下職をさせてこれを作つた。それから京都の聚楽城、伏見桃山の城の瓦もまた幸道が調進したのである。最も伏見城の瓦は藤村久右衛門（多分大阪方の下職瓦師）と分担した事になつてをるが、その瓦は深草山の土で造つたので遂に深草に永住することになつた。豊臣氏が亡びてから後も子孫は代々深草の瓦師を職とし、維新前頃には十三軒の瓦

師があつて、ある人の宗家は竈元と呼ばれ禁裏御所などの御用を勤めた、その村は今でも瓦の煙は絶えないである。²⁴〔後略〕

青山姓の瓦師が聚楽第、伏見城などの瓦製作に当たつたことについて、いまのところ別の資料で確認することはできていない。だが、本願寺の瓦を造つたことは明証がある。

本願寺御影堂修復の際に見つかった安政の軒唐草瓦に「御用 洛南深草住瓦師 青山市左衛門」の刻印銘がある。「本願寺御影堂平成大修復推進事務所だより」にその写真が掲載されており、「これは安政六年（一八五九）の銘が入る南東一の獅子口（ししぐち）と同じ刻印銘」である旨の記述がある。²⁵本願寺の瓦には、大佛瓦町瓦師などが関わっているが、青山家もそこに加わっていたことが確認できる。

これによって、安政の頃には青山本家は瓦師をしていたことが確定できる。ところが、大正時代も末になると、この地で瓦業を営む者は少なくなり、大正一五年一〇月調査では、紀伊郡深草町深草で瓦営業者として名が挙がるのはわずかに四名、その中に青山姓は姿を見せない。²⁶

青山良輔の項で引用した「反古」の続きには次のようにある。

この十五枚ほど綴ぢてある／紙片はどうやら歴々の投票らしい。／上には「戸長月給の事。月給三円也／賄村持市左衛門」と書いてある。²⁷〔後略〕

この市左衛門は本願寺の瓦に刻印銘が残された同一人物だろうか。この「紙片」が何年のものか不明であるが、本願寺の瓦が安政六年作とすると、そのとき弘化四年生誕の良輔はまだ一二歳。市左衛門とは活躍年代にずれがあるように見えるから別人であろう。

もっとも、先の霞村自身の記述に青山幸道の名が記されていたように、代々幸の字を名前につけていた事実はあったように見える。良輔も別名として幸昌を名乗っていた可能性が高くなったことになろうか。

注

- 1 中西裕「口語歌人青山霞村の伝記事実解明の試み」『学苑』89号 平成二十七年八月一日 二一―二三頁
- 2 まったく手がかりがないため、京都市中央図書館に霞村の墓についての情報を求める問い合わせをした。同図書館から、墓所が深草瓦町の真寿院にあり、真宗善福寺が現在の菩提寺である旨書かれた古い文献がある旨教示された。そこで深草瓦町に現存する真宗大谷派善福寺に問い合わせをした。同寺からは、青山姓の檀家があるが詳細不明、としながら、最近墓地の改修をした北村石材店の紹介を受けた。同店に問い合わせをしたところ、青山霞村を含む青山家の墓地が判明したという次第である。
- 3 青山霞村著「実印」『霞村長歌集及詩選』素人社書屋 昭和一〇年五月五日 二九頁。なお同書は国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧できる (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1089711> 二〇一七年一〇月三日確認)
- 4 青山霞村「反古」注3掲載書 一三六頁
- 5 京都府議会議務局編『京都府議会議代議員録』京都府議会 昭和三十六年一月二〇日 五四―五五頁
- 6 「京都府議會議員名簿」、明治史料研究連絡会（東京大学東洋文化研究所隅谷研究室）編刊『明治前期府県議會議員名簿 中』一九五九年一〇月一〇日（明治史料 第七集） 二九、四七頁
- 7 注5に同じ
- 8 青山霞村「三十一字」『からすき』三四号 大正一三年一月五日 三頁に載った一首のうちの一首。
- 9 青山霞村「二つの顔」『京物語』警醒社 昭和五年九月二〇日 七五頁
- 10 形影生『米国苦学実記』内外出版協会 明治四四年七月一五日 二頁。なお同書は国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧できる (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809598> 二〇一七年一〇月三日確認)
- 11 宗形金風『深草誌』郊外社 昭和八年一月一〇日 一三五頁
- 12 同上 二二七―二二九頁。なお、この資料には明治年間にも同じ地位にあったことが記されているが、期間が不明確である。
- 13 河野仁昭「同志社人物誌 61 青山霞村」『同志社時報』第八四号 昭和六三年三月二五日 一〇七頁に、「青山家は現在、霞村の甥策馬氏（同志社中学卒業）が養嗣子に迎えられて継いでおられる。」とある。和造の次男である人物が「迎えられ」というからには霞村の養嗣子となったという意味であり、「青山家」は「青山霞村家」の意味になる。また河野仁昭『京都の明治文学―伝統の継承と変革』（白川書院 二〇〇七年一月三〇日）収録の「青山霞村」では「甥の策馬を養子にしている。財産分与による分家だったかもしれない。」との見解を示している。（二〇五頁）
- 14 注3掲載書 六五、一五八頁
- 15 「デムポの速い短か歌」六首のうち二首目『日本短歌』三卷三号 昭和九年三月一日 一一頁
- 16 注3掲載書 一一―一二頁
- 17 同上 一八八頁
- 18 同上 一四頁
- 19 駒敏郎「ほか」編『史料京都見聞記』第二巻紀行Ⅱ、二六五頁 法藏館 平成三年一月二〇日
- 20 同上 四一―四二頁
- 21 駒敏郎「ほか」編『史料京都見聞記』第五巻見聞雑記Ⅱ、六頁 法藏館 平

成四年三月二〇日

22 注9掲載書 一頁

23 注3掲載書 一一四頁

24 注9掲載書 「大阪城の瓦」 五六―五八頁

25 「本願寺御影堂平成大修復推進事務所だより」六一 「御影堂の瓦について(三)」

宗報 二〇〇四年一・二月号 (<http://www.hongwanji.or.jp/hongwanji/goei/dayori1.html> 二〇一七年一〇月二二日閲覧)

26 井上要編『日本瓦業総覧』日本瓦業総覧刊行会 昭和二年七月三十一日 九四頁

27 注3掲載書 一三六―一三七頁

*霞村の墓地調査は、京都市中央図書館参考図書室、真宗大谷派善福寺、北村石材店社長北村修也氏の多大なご協力を得て可能となった。関係の皆様にお礼申し上げます。

*文献の引用にあたって、旧字は概ね新字に改めた。

追記

本稿を提出後、北村修也氏が「三五〇年前鬼瓦二職人の名」の記事(二〇一七年一〇月二五日『京都新聞』朝刊掲載) コピーを送付してください。

それによると、半解体修理が進む京都市上京区の本隆寺本堂の鬼瓦一六個のうち六個に万治二年年号とともに、「伏見深草住瓦師青山市郎右衛門」の名が刻まれていることが確認された。

(なかにし ゆたか 現代教養学科)